

佳作

13 歳からのバトンタッチ

宮城県栗原市立金成小中学校

1 年 佐藤 陽

10 年後、23 歳の私は、どんな道を目指していますか。今の私にはまだ想像もつかないけれど、大好きな音楽を続けられているといいな。そんな未来の私へ、今の私が体験した『大切な出来事』を贈ります。きっとあなたの励みになることもあるでしょう。

2023 年 7 月 23 日。この日は私の勝負の日となる、初めての吹奏楽コンクール。この日を迎えるまでの 3 カ月、私は今まで感じたことのない心情を抱えながら過ごしてきた。

6 年生の冬、部活動紹介が行われた。吹奏楽部の一人一人が奏でる音色。それが混じり合って一つの音楽となる。私は感動した。一つのものをみんなで創り上げる。音楽はこんなにも人の心を動かすのかと驚いた。音楽には習い事でも触れていたし、6 年生の合唱がきっかけで、音楽の授業も楽しいと思っていた。自分が表現することが楽しくて好きだった。でも、誰かの演奏を聴いて心に何かが響く気持ちになったのは生まれて初めてだった。部活は任意での入部が認められ、入部が絶対ではなかったが、あんな演奏がしたいと思い、私は吹奏楽部へ入部することを決めた。

いよいよ活動が始まると、小学生の時とは全く違う環境の中で、先生、先輩方、同級生、それぞれとの関わりが一つのチームとなって進んで行くのだ。できないから、やりたくないからという自分勝手な理由で行動できないと思った。私の中で初めて『責任』を実感した。ホルンを担当することになり、チームの一人として、学年リーダーとしてやらなければいけない仕事ができる。先生の熱心な指導と優しい先輩方のおかげで、とても良いチームの仲間入りができたと思う。でも、コンクールに向けた練習が始まると一段と練習がハードになり、注意されたことがうまくできない自分にイライラすることもあった。コンクールで良い結果を出したいと思えば思うほど、プレッシャーに押し潰されそうになり焦りが出た。周りからは、

「始めたばかりなんだから。」

と励まされるけれど、（そうじゃないんだ。）と私の心は叫ぶ。仲間と約束した県大会。私はこのチームで勝ちたいんだ。私が入部を決めた時のように誰かの心に響く演奏ができれば大丈夫と言い聞かせ、自分の苦手な部分を必死に練習し続けた。演奏曲を毎日聴き、頭にたたき込んだ。勝つことを目標にしてこん

なに努力したのは初めてだった。どちらかといえば、おっとりとした性格の私が、勝利をつかみたいと変化した瞬間だったかもしれない。

そして本番当日。演奏順は1番で、みんなドキドキしながら会場へ向かった。到着すると緊張感のある空気。失敗は許されないと思いながら黙々と準備を行った。そんな時、トラブル発生。私のホルンのレバーが戻らない。先輩のハイハットの脚が外れた。一気に焦りが増したが、リペアの方の応急処置のおかげで何とか本番に間に合った。気を取り直してステージへ向かった。演奏順を聞いた時は少しがっかりしたけれど、実は1番には特権があった。ステージ上でリハーサルができるのだ。演奏直前にステージでの感覚や雰囲気を確認できたことは、今思えばラッキーだった。

本番5分前、ステージ袖スタンバイ。緊張して手が震えた。先生お決まりの伝言ゲーム。

「笑顔。先生が一番緊張してるんだから。」

その言葉にみんなが笑って、いざステージへ。最高の笑顔と今までの努力を7分間の演奏に込め、大きく息を吸い込んだ。先生の指揮に、先輩の揺れるリズムに合わせて私はホルンを吹いた。目の前にいる審査員の方々や応援に来てくれている家族に届けとばかりに気持ちを込めて。あっという間の7分間で、細かいことは正直なところ覚えていない。ただ、最後はしっかりと決められた。その瞬間、やり切ったと思える自分がいた。結果を聞くまでは本当にどうなるか不安だったが、見事、県大会出場の切符を私たちは手にした。

入部してから地区大会までの3カ月間、初めての環境、初めての楽器、初めての感情、たくさんの初めてを体験してきた。どうなることかと不安だらけでも、踏み込んでみると意外とやっていけることを知った。苦しいつらいと思う練習も、好きになればいい。そして、地道に積み重ねていくことは無駄にはならないと思う。この経験は、きっと10年後の私の力になる。だからバトンをつなぎたい。今よりもずっと大人になっている私は、この3カ月の経験を忘れることなく、たくさんの人との出会いを大切に、自分から行動する勇気を持っていてほしい。小さなことでクヨクヨせず、仲間を思いやれる大人になってほしい。

最後に未来の私へ一言。何度失敗してもいい。何度くじけたっていい。だけど、そのたびに立ち上がり、感謝の気持ちを忘れず、楽しい人生を送れるように、ね。